「神への感謝と神による変化の恵み」
ローマ６：１５－１８

堀田修一　　２３・３・５

Ⅰ　「では、どうなのでしょう。私たちは律法の下にではなく、恵みの下にあるのだから、罪を犯そうと、なるのでしょうか。決してそんなことはありません」：１５。
律法を完全に守り私たちの救いのために十字架で死に復活された主を信じる私たちは、主に結びつき律法から解放されている。そして主の恵みの下にある。主の赦しをいただき、新しいいのちをいただいた私たちは、罪を犯そうという志ではなく、神の救いの恵みに感謝して、罪ではなく、神に感謝し喜んで従いたいという新しい志が与えられるのです→「神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせて下さる方です」（ピリピ２：１３）

Ⅱ　「あなたがたは知らないのですか。あなたがたが自分自身を奴隷として献げて服従すれば、その服従する相手の奴隷となるのです。つまり、罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至ります」：１６。
私たちの人生には、二つの道があります。

１．自分の罪を認めず主を信じないで、罪の奴隷、罪に支配されて人生を続け、人生の最後に死を迎え、永遠の死、滅びに行く人生か。

２．聖霊が示して下さる御声に従順となり自分の罪を認め主イエスを救い主、主、神、ご主人として信じ、罪の奴隷状態から解放され、恵みとまことに満ちた主の奴隷（原語：奴隷、しもべ。ローマ１：１のキリスト・イエスの「しもべ」は同じ原語）となり、義（神に赦され、神に正しいとされ、神に受け入れられる）に至ります。私たちは「奴隷」という響きは好きではない。しかし、このことばには大切な意味がある。罪、悪の奴隷から解放されるためには、罪や悪より強い、もっと素晴らしい主人の奴隷とならなければ、また、罪という主人がやって来て、私たちを罪の奴隷状態に戻す。しかし、新しい主人が神である主イエスなら、主が罪や悪魔や支配的な人の支配を追いやり、主のしもべ、奴隷となった私たちを愛と正しさと偉大な力でしっかりと守って下さる。私たちが、主を信じると、色々な恵みの身分が与えられる＝①神に愛される神の子ども。「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです」（ローマ８：１４）②主の友「あなたがたはわたしの友です」（ヨハネ１５：１４）③主の大切な羊「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます」（ヨハネ１５：１１）。④聖霊の宮「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり」（Ⅰコリント６：１９）。⑤主のしもべ、奴隷「よくやった。良い忠実なしもべ（原語：しもべ、奴隷）だ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ」（マタイ２５：２３）。奴隷と聞くとひどい状態と思うが、奴隷が、悲惨なものか、幸いなものかは、誰が主人かで大きく変わる。また、私たち人間は、気づいていなくても、すべての人は、何かを主人としている事実がある。ある人は、自分は自由で何にも縛られていないと思う。しかし、その人が、自分が悪いことも自由に出来るから自由だというなら、その人にとり悪、罪、自己中心という自分が神の座にのし上がり、主人、支配者になっているのである。「罪を行っている者はみな、罪の奴隷です」（ヨハネ８：３４）。神、主を主人、支配者とする

（神の国＝神の支配の心での始まり）者は、幸いです。神、主というご主人は、恵み・愛とまこと・真理に満ちておられ、私たちを常に守り、私たちに、恵みに感謝してみことばに従う志、力を御聖霊によって与えて下さる。罪や悪を示して下さり、罪を悔い改める志をも与え神に立ち返らせて下さる。※感動的な箇所「もしもその奴隷が『私は、ご主人様と、私の妻と子どもたちとを愛しています。自由の身となって去りたくありません』と明言するようなことがあるなら、その主人は彼を神のもとに連れて行く。それから戸また門柱のところに連れて行き、きりで彼の耳を刺し通す。彼はいつまでも主人に仕えることができる」（出２１：５、６）。証し：グラース師のことば。私も、恵みとまことに満ちたご主人＝神、主イエスのもとを去りたくありません。大きな励まし、まず先に私たちに与えて下さった恵みがある＝神、ご主人である主イエスは、「キリストは、神の御姿であられるのに…ご自分を空しくして、しもべ（ローマ６：16 と同じ原語：奴隷、しもべ）の姿をとり、…十字架の死にまでも従われました」（ピリピ２：６－８）。神、ご主人がへりくだり、私たちのためにしもべとなり、十字架で死なれた恵みに感謝したい。「皆のしもべになりなさい。人の子も仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです」（マルコ１０：４４、４５）。素晴らしい主のしもべになることは窮屈ではなく幸いです。

Ⅲ 「神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規範に心から服従し、罪から解放されて、義（主御自身、神に赦され神に受け入れられる義、神の前の正しさ、神の御心）の奴隷となりました」：１７、１８。

キリスト者には、二つの危険がある。一つは「律法主義」。自分の力で聖書のみことばを守り立派な生活をしなければならないという考えに縛られ、喜びのないクリスチャン生活を送る。放蕩息子の兄のように。もう一つは、「無律法主義」。救われているのだから律法を無視して良いという考え。聖書は、この二つとも教えていない。律法主義ではなく、神の恵みに生きるキリスト者こそ、神の律法（みこころ）を感謝し喜んで守る人生に導かれる。17 節でパウロはいきなり「神に感謝します」と心から叫びます。何を感謝しているのか。それは、キリスト者が経験する神の恵みの救いによる大きな恵みです。私たちの救い、服従の相手を変えていただく恵みは、すべて神の一方的なあわれみのみわざ。私たちの中で誰一人、自分の力や決断でキリスト者になった人はいない。主を信じたのだが、実は主を信じる信仰を聖霊なる神は下さった。すべて神のあわれみ、恵み。ここでの「感謝」の原語はカリス＝「恵み」。パウロは、神の恵みの深さに、手紙の途中で「ただ神に感謝！」と叫びたくなったのです。私も、とっくに滅んで当然の私が救われ恵みを受けていることに「神に感謝します！」と叫びたい。パウロの手紙には心から「神に感謝します」が何度も出て来ます→ローマ７：２５、Ⅰコリント１５：５７。Ⅱコリント２：１４、８：１６、９：１５。後でお読み下さい。私たちも、救いのみわざを成して下さった神に「ただ、感謝します！御名が崇められますように」と賛美しましょう。「伝えられた教えの規範に心から服従し」＝「教え」とは、聖書の教理のこと。初代教会は、早い時期からまとまった教理の規範を持っていた。使徒２：４２には「彼らは…使徒たちの教えを守り」とある。「使徒の教え（教理の規範）がすでにまとまっていた。テトス１：９、Ⅱテモテ１：１３、Ⅰコリント１１：２等から分かることは、ごく初期の頃から「伝えられてきた教理」がありました。初代教会は、洗礼を志願する人には、聖書の教理を教え、学ぶ期間を持ちました。現代の教会も同じです。洗礼の前に、主の教え、聖書の教理を教え、それを信じる人に洗礼を授けます。「伝えられた教えの規範に心から服従し」。主を信じる私たちには、御聖霊が助け主として心に宿られ、教えの規範＝主の教え、聖書のみことばに心から従う心の実、力を与えて

下さいます。「御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません」ガラテヤ５：２２、２３。義（主御自身）の奴隷、しもべになり、主の間違いのない教えの規範に従い歩めることは幸いです。そして、主に従う良い行いでさえも神が備えられたものです→「実に、私たちは神の作品であって、良い（神が喜ばれる）行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い（神が喜ばれる）行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました」エペソ２：１０。

祈り：至れり尽くせりの神の恵みを感謝します。